築山庭造傳　前編　上

北村援琴著述

東讓郞金吾校訂

前編

築山庭造傳　全三冊

藤井宿禰重好畫圖

文金堂藏梓

北村援琴翁著述

承議郎金吾校尉　前編

築山庭造傳

全三冊

藤井宿祢重好畫圖

文金堂蔵梓

林泉

築山山水庭造傳叙

夫山水の起りを尋ぬるに。本朝にてハ文徳天皇南殿乃御庭乃山水ハ。太政大臣良房公の御作也。宇多院の山水ハ。昌泰二年に御出家ましくて。亭子院へうつり給ふ。此院乃山水ハ寛平法皇乃御作なり。太政入道清盛福原ましく新内裏の山水ハ大蔵卿吉成作れり。後深草院乃御子。禅林寺殿御出家ありて。東山ましく山荘乃山水ハ仁和寺乃僧正了遍ま作なり。嵯峨天龍寺及び西芳寺乃庭ハ夢窓國師作り給ふ。天竺にてハ悉多太子八相成道乃園にまさし。王宮を出させ給ハん事を。御父大王不叶を給ふ。太子ゆるし給ハざれども。兎角王宮を出給ふべき氣色見へ給へバ。御父大王是を歎き。いかにもしてとゞめまほしくおもに。太子乃渡しまする宮殿の四方に四季乃景色絶ざらしめんとて。東にハ春乃氣色ある山。南にハ夏乃景色の山。西にハ秋乃景色の山北にハ冬の景色ある山を造らせ給ふ。これ山水乃始なりこれとかくざりし本朝にてハ今都乃邊城中の離宮の四面に四季乃山を作り。時折くまく景色とその葉を及べれ。ぬばかりの風情ありとかや。されども代かはりさ後

かハりて。今なをも秋乃山のミ残れり。其後相阿弥といふ人。古き流れを汲て此道に妙を得て。古法の如く東山慈照院銀閣なる此庭。又ハ大徳寺大仙院の庭など。こゝかしこに作りをかれしなり。今こゝに往古達人乃教を始に記し。次に西々勝景の庭乃図を摸し。此道を好ミ給へん人の為便とおもひ侍るのミ

干時享保二十龍次乙卯秋吉日執毫於向陽堂

洛下　北村援琴齋

築山庭造傳目録

築山庭造傳目録 終

築山庭造傳

山水作りやう法式

凡山水の作りやうハ。第一地形乃流水と眼前の決置より山水れいとやうと割おし。石と建、草木と植て景色を顕すものなり。たとへバ漢土の廬山を模し。西湖の面影を作るなど。其流り甚くけいてんかうさきやうなれども。僅まとすの紙よ写しうるおとえても。即時よ地形木石のりやうを胸中よ含納して。庭坪広狭に拘らく。築山遣水をうしくおもてハ道乃巧達ともに。庭を作らんと欲する人ハ平生風景勝れる地よ到て。其大

を離別といふ。人を構へあることなれども。今新に物を造りなすを時んとつけざれバ卒尓にして縁離るゝ過失あり。故に庭を造るにもやう而已に氣をつけて。縁不縁乃差別もなく。卒忽に一木一石までも並べすゆるならバ。此一事を數多く紙筆に記し盡しがたし。此もの處に一二の大綱をおしく准へたる便とせり。以上築山第三乃傳とす。此外ハ接秘傳ありといへども此三ッの目を遁るゝ處なし。見背忽にすることなかれ

二忌五禍ある石の事

山あるハ大石に二忌二禍といひて嫌ふ事あり。二忌とハ。一ッにハ家乃棟とさる石といむべし。長き石の端より奥へ伏るく。其家の棟に違ふをいふなり。但山溪の奥などハ苦しからず。一にハ重く禍の前に □ かくのごとくかどありてすわらざる石をいむ。三ッにハ客人鳴乃前ふ面の向ふる石を忌なり。此禍とハ一ッハ頭大きにして地きハ細き石を嫌ふ。二ッにハ二ッ石を立ざると嫌ふ。三ッにハ孔ある石を立ざる事嫌ふ。此に守護石なき事嫌ふとしるべし

二祥三吉との事

二祥とハ。一にハ東南面の庭を祥といふ。二ッにハ瀧乃後に高山大木ある事を祥とす。三吉とハ一ッにハ

主人嶋に安居石をさだむといふ。二川にハ西南乃松とよく
やさあるまぶりを植るといふ。三川にハ庭前に砂利を
まくをいふこれを三石と表す

面に植る草木の事

万年青　紫竹　面に植ざるなり。おもとハ名よ
ろしき故。紫竹ハ娥皇女英乃涙より染出しる竹なりと
いふ。又芭蕉を主人嶋に植さるハ風にあひて破れやす
きゆへなり

蓬莱乃嶋に橋かけざる事

中央乃嶋。蓬莱の形あるハ情の気色ろし故。海中にある
嶋にて仙人のすめる所なるがゆへなり。吹上嶋なかき故
極濱乃きろなる處にハ耳石をそへず。又昔のふせ次砂利
を海くる吹上るていをまくなり

本木離別といふ事

本木離別といふハ深山に生べき物を前庭に植。前庭に
生ずる物を野山にうゑべからず故

冬木枯木面前に植ざる事

冬木とハ何にても葉乃落る木をいふなり。但梅など
ハくるしからず故
以上各不相應とも離別ともいふなり。是等の忌嫌を

よく考へてよく除くべし

平野の事

平野ハ尾上なきこころなり。石を主居として次

山水遠近の事

遠山ハ低く近山ハ高し。遠きハ高く近きハ低し。此こゝろを
以て築山遣水の巧をなすべし

築山不相應の事

築山立石ならびに行草の古法あり。往昔相阿弥の作られ
し圖式を見て會得すべし。今板行して世に流布せる
ものハ此書に漏るゝなり。然れどもあるひハ圖のごとく
庭を作らんとせバ其のまゝある岩石なく。都て庭の模様が
くずして偏屈なるべし。古法を見て作意のとゝのへてとすべ
し。小庭にあまり大石を立るべからず。大庭に小さき石を居る事
第一の不出來なるべし。又小庭に遠の山水もせバしきやう
にてこゝろなかるべし。作功者の上にてハ狭き庭に遠の山水を
風流に作りなすハ甚むつかしくて世ハしかる法じ。當世ハ大概
行草を専らとして眞をかろしんず。峯もたるさも右の書に目

築山泉水比喩の事

凡山水の表示になぞらへてあり。士武農商の家々庭ハ吉事を表
し。守護蓬莱二十神等の名目あり。佛者寺院等の庭ハ

八禅門の名目を表するとし勿論なり。故に此書古人乃定め
給ふ名目を挙るく。僧俗二家の比喩を下に記をそのなり。假
人甚ねむところに従ふべし。

景地を望み見て寫しやう乃事

先山水を作る第一の徳なり景勝れる所に到て此形を庭に寫さんと
欲せば其所の正面より真中の景をみて峯の上の形中ほどの形を
見とりし其間に飛石為る木石の形を見て先を画帳紙に書
寫し。山下に谷或は流あらば其下のさまを寫し。夫れより左の方の山峯を
谷或は瀧あらば其形を上中下と見てしかして。又畫圖紙乃左の
方に寫し。扨右の方の山峯より下へ同じく上中下と見
て寫し。いづれも其間の木石乃形を畫圖紙の右の方に寫し。
夫より山より下れた右中の景をそくと見わたしく殊に
所に寫し。扨たへよりて向乃景を見わたして左より右
石乃景を紙に寫し。又右乃方へよりて向への景を見わたし
て右より左る石乃景を紙に寫し取べし。かくのごとく望み
見て目に遠石乃高低曲直。其所の木石の形をそくと見定
べく寫し取べし。池の形は湖乃景を寫すとも。右のごとくに方
の正面より向へ或は三所に見渡し。又左より見わたし。右より
見渡して其所の摸様を紙に書てん宜へとすべし。畢竟
山峯瀧谷等は上中下に摸様を寫し。湖海川沢池等も同

に及ぶ向ふの端々中かどこ。にある乃岸と。いづれも三段に見て景と取べきなり。景地に判て悪く真撰様を写さんとせバ数寄乃家に見違ひ費度にも非ありかたくんと労する費あり。右乃ごとく考ぬれバ景乃見所の眼を写し。築山に撰して恰其景地に判て足る亼地すべし。然れども此條ハ庭て景地を三ツ見されハ工夫出ざきものなり。此條のごとくんねて於りてしるに山ある数景を見おふべし。是山水を撰す秘撰より意に譲ることかなれ

庭坪地形乃事

庭坪地形の部おくに出決

庭坪の地形乃事是肝要也聆しひなりとし景を見て含ねすべし

石乃立様木の植様乃事

大概古法乃昌と考て石ハ立不木の植石と旨とし。畢竟岩石と集て恰ぬとえつくろひ。立石伏石山峯龍鳴などに居べき工夫次ハ似べし。顯なり庭のとやうと定むべき事にあり。次岩石を之て自然と面白き景とあらハも事此道のかなよして。数が別侍とも以ふべし。上へく造化自然乃体を貴ぬ。強く巧さるを嫌ふ。石の居不居しい事自然の景としてしと忘れバ如す石居がきき者なり。要して山ある撰やうハ薬初にして幽深玄遠なる事を欲し。神造自如の境に致と功業の作をす。木乃植やうも亦かくのごとし。面前の近きハ枝ありれ風流なるを用ひ山峯滝瀑布等石れ恕意を見合景を撰して植へし。

植込の樹木ハ繁くして其中に深とおすべし。古人栖霞亭苔に
曰冷烟纏山腰暗水潤石骨。欲風松先鳴未雨苔已滑。自神仙気
を含めるね山なれバ風景眼前にありハもてあそびしこゝろを味と居べし

立石陰陽の事

立る石ハ陽なれバ石としいふべし。故に滝口にある
つきをる故に陰なれバ水滝口にたるく立る陽の石を
立べし。陰陽ハ陰陽和合の道理なり。横なる石ハ陰の石と
いふべし。陰陽和合まして肝要なり
熟じて石に限らず何事までも豎と陽と横と陰
といふべし。不立石。不臥石中程の石をも陰陽和合
の石とよぶべし。又川除石といふ類もあれ名ある石
なれバ爰に入らず

瀧泉の事

龍門瀑ハ廬山の瀑布なると龍容とあゆさあり。寺院ハ
なる乃瀧にハ無熱池の瀧にをかしきるなり。又天竺ハ
大雪山の頂に無熱池あり。此より流きて四大海へ落る。東
ハ銀牛口より流き出く。殑伽河となりて東海に入る。
南ハ金象口より流きて信度河となりて南海に入る。西
ハ獅子口より流出して縛芻河となりて西海に入る。
北ハ頗胝馬口より流き落く。徙多河となりて北海に

入る。此界ハ南洲なるが故に金象山と表す。依て山水の滝口も大方東南乃方にあるべし。然りといへども大概座敷乃上に構ゆる故に。西北にもあるべし。是ハ座敷乃上の方に滝口あるとあるべし。滝口南にあらバ北方に必香源山あるべし。山なくば樹を植べし

滝副乃石之事

瀧口に必滝副の石とて大石を立る物なり。佛者ハ不動石とし又其左右に童子石を立べし。或ハ八川或ハ四川。或ハ二川なり。是則ハ大童子四童子二童子なり。不動石乃下に石座を立る。不動明王ハ大盤石に坐し給ふなり

此石ハ有志不定なり

蓬莱山乃事

山水の中央に蓬莱山あるべし。是瑞言なり。蓬莱山ハ亀なる形なり。故に亀頭石　亀甲石　亀脚石　尾端石を立べし。此立様の川でも大事なり。此嶋を中嶋とも云。又松杉植るなり。もし木なき時ハ亀乃形の石を立るなり

二神石之事

山水の前に要なる所に必二神石を立置し。又二王石ともいへり。又二種石ともいへり。石の形によりて二川三川副石あり。

作者のくふうによるべし。二まろに滄場あり

山水に橋のかけ所の事

山水に橋のかけ所ハ。番河すそし中嶋としてあり。瀧口に朽木をひいて橋をかくる事あり。是ハ猿などのつたひひかれるべし

瀧口の石の事

瀧口の石に 水受石　渓副石　波分石　水越石　など いふ石あり。是山水の大事なり。能居を考へて立べし

水吐石の事

河すそを水吐といふ。又瀧口南にあらバ水吐は北の方にあるべし。是熱池の和合と従水河といふ。故に従水流といふ

河すその石の事

水除石　落水石　渓受石　塵流石　木葉返石
水門石　等あり

客人嶋の石の事

山水の池の嶋に二ツ嶋あり。端なくある嶋は客人嶋といふなり。此嶋に　客拝石　対面石　履脱石
宿石　水鳥岩　などあり

主人嶋の石の事

石乃名并に事　並にあり所乃事

鴛鴦石　水きハにあり　魚漁石　河すそにあり　垂釣石　岸にあり

虎渓石　山乃渓にあり　鷂陰石　山乃上にあり　遠山石

石盆硯　帯石　硯滴石　いづれにもあり　硯用石

筆石　筆架石　怒濤石　これらハいづれもありきにある石なり

渓間に植る物乃事

蕗　芝蘭　紫苑　菊　玉簪花　芍薬　萱草

等乃類　渓間に植べし

草木植る事

梔子　柏　楓　葛　山にあり　女郎花　野にあり

[illegible]　梅　菅　深山にあり

沈丁花　丁子　栂　藤　百合草　山花なり

蓮　菖蒲　澤にあり

芙蓉　銀杏　伊吹　一八　黄梅　躑躅

山花又嶋にあり。名草名木其数多かるべし

田畠乃事

大なる山乃上山陰谷間などに田畠などの躰も

あるべきなり。又河すそに作る事もあり

九字乃石立やう乃事

山乃作様ハ公家武家乃社寺皆同事なり。数と

いへども山水に習ひあり。石を四竪又ハ横と立るなり。是ハ九字乃心にてかくのごとく石を立れバ怨敵悪鬼等を拂ふの義あり。長く尖る石。三角なる石。片下りの形ち石。戸板のごとく横に立る石ハ四竪又横乃石にある法かやうの石のいづれもよし、石乃かたち四竪又横乃石を立る石四川手なる石又川に立るなり。不立不外去石も竪横乃石にある法。形別あるべき者なり

竪横乃形の石の事

かやうの形乃石ハいく種ありても。竪横乃石乃数に入る法。副石にすべし。四竪又横乃石ハ立やう。石ハ器のごとし。但同形乃石を四方に立れバえうくきあり。立るともさすが目に立ざるやうに心をこめて立べきなり。石作者の意にあるべし

上坐石乃秘事

寺院等の山水に一川ある時秘事あり。山乃麓に木を植ゑく。木のかげに平石をすゆる也。此石を上坐石と号せり。其石ハ因縁ぞ。天竺摩訶陀國伽耶山乃麓に鉄林樹といふ木あり。其下に上坐石といへる石あり。三世ハ諸佛出世の時。此山石の上にて正覺なり給ふ故に。正覺石ともいふなり。又三界獨尊石ともいふ

なり。此石をかざり座中に立をきく座するときにも。礼をも精しくて正覚乃縁とむかふなり。総じて佛在に入事ハ表示とをすとす。或ハ客人島主人嶋にもも此石乃こゝろへなるなり。是ハ上座石の大事といふ。別に示と播へてとく悉きなり。

築室乃西芳寺にも夢窓國師乃作の上座石あり

呂律乃石立様の事

律ハよくすゝりかゝる石をいふとそしかけくる示にハ副石を立弱き方にもも石を立そへて威儀具足するを律といふ。呂にもと八つゝて二示二示に其間を又六す或ハ丁夫稲のけく切々に立そく是呂なり。人の根本に仁義禮智信ともりて甚てとく行なふを律義者といふ。又常かけくかさ落なる状呂なる人といふごとく所り

律乃石

呂の石

かくれごとく甚飛すゝりかゝるハ律なり。すゝやさるハ呂なり。律ハ吉事にて生の方呂ハ凶にて死の方律を陽呂ハ陰なり。故に呂状石と下向き立かしれにあく次呂律の二徳を説く。万物生生する故に。呂の石ハ示に

より山陰にあるなきなり

基の山々に佛菩薩の御名を配當する事

九山八海ハ西方淨土九品の曼荼羅を表せり。故に石組如く佛菩薩聖衆の御名なり。又山嶋平沙等是九品の次第なり。故に山々ある所へハ佛菩薩常に御影向ありといへり。毎日塵埃拂ふへしとそ

九品の次第

三尊石のあり。品ハ上品上生なり。左の山ハ上品中生也。右の山ハ上品下生也。中嶋ハ中品上生なり。山腰嶋ハ中品中生なり。瀧腰ハ中品下生なり。尾崎左に嶋ハ下品上生なり。右の嶋ハ下品中生なり。平濱ハ下品下生なり。立石ハ二十五菩薩なり。中川ハ七宝の池なり。池中の掛橋ハ則弘誓の橋にて大勢至菩薩影向の蓮臺なり。或ハ又十六大菩薩十二天。十二宮二十八宿にもかたどるなり

佛菩薩御名之事

阿難。加葉。目連。迦旃延。憍梵。波提。富樓那。須菩提。羅睺羅。其外大阿羅漢等不休息菩薩。滿月菩薩。寳月菩薩四大天王。跋難陀竜王。阿修羅王。難陀龍王。釋提桓因。日天月天。皆是釋迦會座也

佛菩薩乃御名配当之図

文殊
或大威徳
普賢文殊晩菩
弥陀三尊
大日三尊
釈迦三尊
虚空蔵
或不動
妙音天
梵天
火天
地蔵菩
普賢菩
帝釋天
月天
或軍荼利
智慧菩
自菩
弥陀仏
観音
勢至
或降三世
風天
喜菩
語菩
夜叉神
室菩
歌菩
舞菩
三菩
利菩
幢菩
法菩
薬菩
火天
燈菩
咲菩
韜天
慈氏菩
香菩
花菩
嬉菩
拳菩
護菩
精進菩
受菩
持國天
伊舎菩
地天
羅刹天
廣目天
天
藤菩

右の嶋山乃仏者秘伝本来これはすぐ色しざるものなり

五大配当之事

山乃ハ地水火風空乃五大配当乃事。是亦別して秘伝なり。地ハ山嶋なり。水ハ海なり。火ハ草木の花なり。風ハ咲すも散るも風乃まゝなり。空ハ諸菩薩樹木枝葉まで

きハ空の色なり 青白赤黒黄 空風火水地 五色なり。又五行なり。
五輪なり。故に肝有して法界乃體なり。是又仁義禮智
信乃五常ともいふべきなり

山水を愛する人の事

夢窓國師の云。古へより今に至るまで。山水とひとしく
山を築き。石を立樹木を植て水を流し。昔に愛する
人多し。其風情ハ同しといへども。其志ハ各異なり。
或ハ我心にハさしも面白と思はねども。唯家のかざりに
して。世の人にいみしける住居なりといはれん為に植
る人もあり。或ハ万事に貪着乃心ある故に。世間の
珍寳を集めて愛する中に。山水をも愛して。珍石
青樹を撰ひ求めて集めとゝむる人あり。かやうの人を
山水をハやさしき事とハ愛せずして。俗塵を愛する人
なり。白楽天ハ小池を掘りて。其邊に竹を植て愛せら
れき。其語に曰。竹ハ是心虚なれバ我友とす。水ハ
よく性浄なれバ吾師とすと云。世間に山水を好む
好む人。同くハ白楽天乃心をこゝろとするハ実にこれ
俗塵を離れ。天性淡泊にして唯詩歌を吟じ。泉石
に嘯てんと思ふ人なり。烟霞ならい痼疾。泉石
膏肓といへるハ。かやうなる人の語なり。是とハ世間

まゝやうしき人とおもはるべし。またおもひかやうなりとも。さしろんおくハ是亦輪廻乃基なり。或ハ此山水ニ對して眠をさまし。徒然を慰め又道を行ふ一助とするときハ貴しともいふべし。然れども山水あいし道を行ふとも。よく差別せバ。眞實乃達人とハいふべし。或ハ山水草木鳥石等愛。是自己乃所縁ありと信ずる人。一筋ニ山水と愛する事ハ世の情ニ似されども。好て其世情をはなれて。泉水草木四季ニかえる氣色と工夫とする人あり。然よくかやうなるハ。道人乃山水を愛するとやうと志るべしとをし。故ニ密家ハ此山水と尺く。六大法身當相即事而真乃旨と覚知し修すべし。天台宗ハ一色一香無非中道のさとりを説。小乗なる人ハ四季乃轉変と觀じて。無常の心と起すべきなり

山水ハ五行ニ姓とある事

南ニ山水あるハ火姓の庭也　北ニ山水あるハ水姓の庭也

東ニ山水あるハ木姓の庭也　西ニ山水あるハ金姓の庭也

南ニ山水あるハ北向の庭也　北ニ山水あるハ南向乃庭也

東ニ山水あるハ西向の庭也　西ニ山水あるハ東向乃庭也

相生相剋之事

木姓の人ハ水相生　土相剋

火性の人ハ東相生　西ハ剋
土性の人ハ西相生　北ハ剋
金性の人ハ西相生　東ハ剋
水性の人ハ東相生　南ハ剋

然りといへども古へよりある庭ハくるしからず。然ども山など
を造る時ハ其地を察りて作べし。深秘口傳すべき秘事
右の山ニハ諸佛影向なし蓮臺ある庭なれバいかなる所にても
方角様か泉ハ造りて苦しからず。都て其家の守護と
なるべし。山のてくありといへども。山水なれ法式ともあらざれバ
推量に石を立。樹を植ば。守護とハなるべからず。分別ある
べき事なり

石を疊といふ事

世に云傳ふ金銀の石を疊む事妙ありと。凡石を疊む
といふ事ハ間尺僅に究つまる庭に。深山幽谷の趣きを
あらハさん爲にして也。名人の作意にあり。未練なる人ハ
なぶべきさまにあらざれ。其大旨を謂せバ。石の竪横を見計
ひ面前より奥へ居ならべ其あしらひの樹木高低を
別て據ハ石の根を隠し。或ハ石の中央をあらハに見えせず。
損格をそこに當て是をあしらひ。副石のきひやうに
んとこめて。面前より奥の方へ。山峰幾重も疊しける

ごとく景をあらハす。是を石を畳といふなり。たとへバ十二
畳十九畳などゝ世に云伝ふるなり。あながち石を十二据に
畳十九据に畳めることにハあらず。石のつかひやう。あ
しらひにて費をも模様をあらハし。さながら十二畳
にも十九畳にも見ゆるといふてなり。又小庭平庭に
石を多くもちひしといふてもあり。別に樋接なれバ庭に漏し作る。
瀧を造るに上より下まで一筋にあらハるれバ瀧僊がごとく
くるしくして風景すくなし。瀧の上を樹にて隠しあらハに
みせむも滝の中央を岩或ハ樹の枝にてさしむける形を
なし乃岸の脇の草なとあしらひ漪を悉にあら
ハにみせざれバ自ら数丈の飛布とみゆるがごとき思ひあり。
池も又しかり。池の形四方あらハに見ゆれバ。何ほど広き池
なりとも甚広けくと見尽して風情すくなし。小さき池
なりとも形を面白く曲となし。此彼所へ草木石のあし
らひにてあらハにみせざれバ。自ら湖海眺望の気象も
籠るべし。是等の工夫にて山水を造る極意。深く味ハへ庭き
事にこそ

山水気象体志乃事

山水に気象体志を備ふること辨知べき要なり。気象
といふハ築山遣水を造るに甚主人乃心に適し風

然乃氣味を象出すことなるも繪がきさものあり。詩家
に氣象と寫しなすといへるに同し。輪苑氣。山林氣。
市世氣。神仙氣。儒仙氣なしく差別をたてしびろの式
にあるべきこそのなり。體志といふも詩家の説に同し。作
りせるものまゝ自然にし體格備り。高逸貞靜德識
筆乃志をあらはすしもの妙理あり。景を面白く寫さんと
すれバ模擬を巧にすれバ氣象を失ひ體格定らず。都く
鄙俗の體をあらはす事多し。慎むべき第一なり。すべく
物好れいやしきと志ほくしきといふ氣象のなすところなれバ
始に氣象の野を離れ只自然の江山幽地の思ひをめぐ
らして偃仰にも浮華の態をなすべからず。むも庭を
めぐらさき表裏を作るといへども元來山水を寫しなる
物なれバ村里偏地のありさまとあしらふべし。田舎め
きたる景ハいやしきなく捨ることなれバ。氣象を描
くいやしきとハ無理につくろひかざりを表とよそをいふ
なるべし。氣象正しくされバ體志の亂る事なし。次の
墨乃勢を考へて體格を辨知べし

眞行乃景と築庭なへうらるる傳

自然の眺景を用ひて庭を作るに從ひ作者の働きあ
るべき事なり。書院座敷等の様より見渡し。

境内ハ山をひくめ。又ハ樹木等をきりてとをき眺望乃景を庭者へうつしうくる事あるべし

茶人の庭作りやう之事

茶人乃庭ハ作りると見へざる様よ。或ハ在家市中なりとも山嶽深谷へ入るやうよ作りなすべし

水なき庭之事

水なき庭ハ山嶋まてなきところを。白沙よして水なかりよ白沙計用ひ。瀧も水なき瀧なり。作りやうかはる事なし

石燈籠時様乃事

石燈籠乃時様ハ作意多くあり。次乃景よある燈と考へ時好とあるべし。言さ之事。さはくの傳あれども強くすて人よ拘ハらず次。只燈籠乃大小。庭の廣狭よ應じて恰好見合せ肝要なり。只我家のうつりを計ふべし。燈籠乃石様四角なるハ曲よ方面と見せてハ風情すくなし。角をすらし背て建れハ幽遠よしく面白しかやうれ事。都て庭の模やうよ心ゐある事なり

大なる立石を直しやうれ事

守護石瀧副等の大石ハ月を經て地中へ張延あるゆゑ

なれバ遣庭を時くハえあしさめ居石まバ縦かどとの座を
なすべし。是をなをすまゝ夫石なれバ其側の葉末を除き
大勢の力をかりてもち上座すること甚労煩なるものなり。
是を容易座する手段あり。其座すべき石を薦まて包。
あ方より手木を括りつけ槌木を数くもちて其の端
まおよても土俵をもても重石となれバ立石抜出ると。一人
して石のゆかこと自然ま動し石の根ま土を入て縦かど
ま没め座すべし。此法人数を用ひず石の側ま樹木等
を除き損する費なくしても良計なり
古え修して性質達人乃記し置給ふ秘書乃中より

抜萃して。根気ある乃睦しふるき石を。俗語ま解して同
志乃人まる示す。敢く愚言も管測まあく浅視人
苟且ま考ることなかれ

たくき土の蒔様ま莫ハ育ある事

たくき土の気分ハはじめより。莫をへ入ても浅くて沈み
乃気ある由へ莫をとゞざるなり。三十日も経て後よく
く水をかへて後莫は入るべし。たくき土をうくく時ま
跡ある乃芽ゝなる株をたくき入れハ莫よく保川なり。夫
蚕を横ま埋てをくべし。莫隠れなりて蒔しふ果ハ育
ちかねるとれなきことも。大きなる跡ある株ハ身中へ入とち

かけてよし

松既に枯んと欲するを生す法

松すぐに色変じ枯んと欲せば。其根を堀出し。小根入ずと絡にておしつて抜かけ。其ひきめくと鰡にて奏青にてくりてりしのごとく植へべし。他から右根まさるべりし法かくれてくすれば能く生かへる事とし替よくするも事如秘伝なり法

石燈籠に手水鉢など能く古びやうにする伝

新しき石燈籠手水鉢などよく古びやうに。右に稿とぬる。其上へ落葉をぬりかけて捨ておくべし。唐紙と泥落葉を擣き後白苔つきて古くなる事妙なり。青苔をつくるには米のゆりたる滓をさいくくにかくれば能く苔蒸しぞ蝸牛を砕き其汁を石にすりつけ木陰におきて切々水を洒ぐべし白苔の事に生古くなるなり

泉の魚を鮑に取る法

胡椒を紙に包み池の四方に立ておくべし。又蜻皮とまたまみと硝子の徳利のうちに入。泉水のうちにつけおくべし。能く来る事とおなし

竹を斑にする法

硇砂 五十匁 細末
緑礬 二十匁 研細末
膽礬 二十匁 研
石灰 五匁

南都般若寺石燈籠
南都東大寺三月堂石燈籠
惣高サ九尺
大ぶくろ六角
石燈籠
惣高サ六尺五寸
大ぶくろ六角
京都妙顕寺石燈籠
惣高サ八尺
台高サ四尺
台まで五尺
三十四

手洗水鉢之圖
富士形
方星宿
圓星宿
石水瓶
司馬温公
石水壺
唐船
石燈籠之圖
利休形
雪見
珠光形
遠州形
宗和形
有楽形
織部形

又石燈籠あり。手洗鉢あり。石ハ大和國御影石を以て第一のよろとし。丹波國の石を第二とし。山城國白川石を以て第三とし。近江國木戸石を以て第四とす。其外自然石の石燈籠丸笠又ハ自然石の手洗鉢にありてハ天の成る奇物なるべし。其外深山の珠石洲石の手洗鉢なども奇なる物あり。奇物ハ賤者の好むところに賢るなれバ庭へやうなる事なし

築山庭造傳巻之上

F 60
4
築山庭造傳
前編
中

萬古對佳境

座中造化四時精
壽石疊浪累葉生
雨徹風光青妙繪
一幅圖畫自分明

恬齋題

式法之庭
高明絶一體
此景
君子乃德ある
妙心寺大通院庭

三井寺
上光院
庭
細密清淡體
うつして

造化周流體
人作あらざるやうよ
自然と景色あまねきすがた
三井寺
善法院
庭

三井寺
光浄院庭
文采清奇の體
ふて乃あやう
いさぎよく
奇妙なる
すがた

平心和氣體
大徳寺中
芳春院庭

天然去飾體
天然とある山のごとくつくりひろげるなり
西六條河口屋庭

相阿弥作
東山長楽寺庭
手致天趣體
庭の景をぐれて自然乃趣あるすがた

築山庭造傳
遍照心院庭
摸廬山景と
會攝聯綿體
庭の摸やうくハしく
つゝねるすく
八

寫意無窮體
意をこめて景色
窮なきしるし

會秀儲眞體 桑野西芳寺庭
神仙ゐ住居乃ごとく
夢窓國師作也

東山慈照寺
銀閣寺八景

鏡湖池

法式之庭

幽深玄遠の體
小庭と深山
幽谷のごとく
造りうる
すなる

法式庭
蔦景雄深體

法式庭
法度沉着體
法式とさてもまことやかなるすかた

北野松林寺
金森宗和作
涵養幽情體
茶人

静想無礙體
独さびて
ざる
茶人庵

安藝国巌島之景

爰に呉より号する鉢山水と號くハ其主人愛むところの海の景色を
遷さんとするなり況や鉢山ハ限らず庭相應に
おのおの好みや又差ある
好まるる時を
其家の
職より
より業に
寄て諸国の景地を
写し得べし只何国の何景といふ事なく作意べからず
又好むままにいかなる国の景を造るべからず但り山水を作りて童
蒙の戯にあらずここそ肝要なり彩色の絵と又墨画と素人と好人とを考へ給ふべし
陥らぬやう外に傳秘法を聞ぞ見ぬきのなき術様で上達こそ為し

橋掛の樹乃事

是ハ橋の樹とハ橋の手前に樹を植其の枝葉橋上に
さし出て水面に影を流さんとするなり紫ハ為
よろしかるし

飛泉障の樹乃事

瀧乃口或ハ池の此方只瀧の手前なる方に樹を植て
飛泉の水乃ありありと見へぬやう奥深く木暗く思
はせ樋に造るべし木ハ何にてもよろしけれども常木にて
樹やうなるべし

庵添の木の事

蹲踞の腰掛或ハ峠茶屋亭東屋杯の軒近く木を
植て遠方の日陰とし又ハ木ハ何にてもよし松樹
第一にして栗柿等ハ次なり

土手見越の事

見越の木ハ内を三分外を七分として景を造るべし木
ハ松よし或ハ櫻椴梅槙なとよし

池際樹の事

池際に木ハ枝を水上にさし出て宛も水際を見
せ或ハ月前のながめとなすなどとも心得て枝を振らせ
に植るべし是等ハ現在の景色の餘慶なり木ハ
何にてもよし

總じて木を植栽の事

木を栽るに只むざと木を植後に添地とするそのよしあ
らば先石を居て道をつけて後木を植るものなり趣向ハ
見聞知をもって飛石の趣向在郷の野村端山のまた谷
山間などの摘さび面白き景色あるものなり昔より数寄者
ハ野山杯の風景を心に持て皆造られ趣向せられしなり
道安老人杯ハ家を崩しる古屋敷路地の趣向にハ
しつらへしも佗なり大木あり古き時ハ木を先へ植
大石のあるときハ石を先へ居る習あり是遠き景を

路次の内へとらん所におもて向ふ所の樹に並して高き木を
植そまより遠く低き樹を植べし又木竹ともに植揃
三ッ一ッ又ッ二ッ抔と植べし或書には二ッと嫌ふことあり是
は三金輪といひて樹を植て悪しといふ事ゆへ其ごとく
などいへるは人の悪しといへば悪なるべし又曰縦するを
獨子といふことあり此縦するといふはならむといふの転語
なるらん眺むれは其樹二ッなり是も三ッの説に同じく去
なれども二ッも三ッも連しに植る時は樹重て一木に見
ゆる是といへども独りの植揃といふなり又三ッ二ッ横に植
る時は三ッ三木二ッは二木に見ゆる是様と建並べたるなり

縦ならんこと何の景にかなるべからんや是も三ッと植なば
右の如く植べし二ッと植なば
かくのごとく植べし五ッと植なば
部のごとくや植べし利休は近きに高木を植て遠きに低木
と植て先下りに教へ織部は近きに低木を植て遠きに高
木を植先上りに教へより又路地に樹の木を植ること
織部植始るとみへより路地に竹を栽ること石州植始

るべし南天を植ることは築山左遠栽始となり

樹掘様の事

樹木を掘起さんとするには先其木の枝振得となるをあてゝ其枝乃多くさし出したる方より掘始むべし此方に差出たる大小の根を切廻して夫より枝のすくなき方へ掘べし枝少き方は其根少なければおしはかり知べし根は枝に同じく枝の多くさし出たる方には根果して多きものなり又寂く植替たる樹は其差別なしといへども若しかりとも何れの方よりなりとも勝手にまかせ六分通りに掘まはして二分通りは掘残して先方より先に掘る方へ向け木の元をおして押し倒せば其侭鉢付て程よく起るものなり掘廻し乃仕事は氣いらちをとして樹をゆさぶりて掘かげんを試ること悪し木をゆさぶれば必其鉢破るゝと知べし

木根搦の事

根をからむは縄にて鉢を幾所もぐる／＼と巻是を根の鉢巻といふ其土へ手助掛と云て筋違に縄を幾筋にもかけるなり是を手助掛といふ其上より立根を切べし又至て大切なる樹は其上に網かけといふて縄にて堅く網をかけまはしおくなるべし

藁の薦のといへる物なるものにて包べからず薦にて
包めバ其上ハかわく縄にてくゝしむるとも中ハ動
同様にて土ハしまれども其土を落る事疑ひある
ゆゑいへども能〻心得べし

樹植やうの事

先根を静に穴の中へ入て夫より大根と定むべし
此時無理をせバ忽ち其鉢破るゝと知るべし なれバ
ぐるりの儘先土を三分入てそれハ又と立根へ添ひ
いもそ人ハ底の尖までたるを持てそろ〳〵と根に泡
在捌にて鉢にさそりぬかり鉢乃廻りと突べし先
木に肥するにハ何かハ捌にて土を穴とあけ其穴へかけ
なみて土を流し込所より底へまた土を入もち落付
する乃仕手と知るべし さて此なの潜と引切土乃
居付きさわるまでまゝ此儘にてさし置べし然して後
水よくひきたる居付きたる土にて彼根ぐるみその縄を
其土より上へ出てある所を切掃ひ取て夫より土をいま
荒になるハ此度ハたゞハ用ぞそもより此土を何にて
また乃雑具を持て能土とハ搗かたむべし 又至て大切なる
植木ハ樹を穴へ入ざる先に其穴の底乃真中へ荒麦
を木の大小に應じて壱升或ハ二升三升を入べし

松梅ハ其土ニて植て十日斗もありて後肥とて養ふべし其肥土ハ川芎ニ泥をまぜり其製方ハ角川芎を能煎じ出して其煎じ汁を能冷して其をば松の傍近の廻り乃根先と覚しき辺を堀ておくべし数度もかへすべし松の肥ハ是川芎ニ限るなり自然乃肥よりハ利も害もあるハ川芎ハ決して害なしと知るべし

木造り乃事

松を造るニ縁割 捩割 指割 葉刈 摘穂といふ種く乃仕事あり其縁とハ縁ニて透すばかりをといふ捩割とハ捩りて透し捩ると云指割とハ捩割の上ニて指にて古葉をむざと落し能念を入ることゆび割といふ葉刈とハ指割の上にて葉先をよく刈揃へると葉刈といふなり又玉造り佛せ造り光琳造りなどいふ造りさの名ありてさまざまに通れど竟ずる仕事の品ハ一品なり玉造りとハ竹の輪を入て丸く造りなせる故ニ玉造といふ佛せ造りとハ小枝を竹へ佛せ結び付るによりてふせ造りといふ光琳造りとハ其形光琳が画る松の画ニ能似よせたれバ呼るなり

葉刈の透しといふ事是ハ木摩樫の類なるば

遠し方ハ殊の外六ケ敷ものにて松ハ素人の手
にあハぬもの也此等の葉をのこす事ハおひめわかる也
あり留葉に一枚二枚三枚抔といふあり一枚
三枚ハ吉二枚を嫌ふ也

ヨシ
ワロシ
ヨシ
ワロシ

是を鯖尾といふなり

是等ハ手竟法ケ間敷事にてさしてそれの義に
のぼる事にハあらねどもたゞ心得置べし惣じて枝
葉ともに重なると重箱といひ同勢の上下なきなり

ざるやう見込の奥口重なりあハざるやうに遠すべし此
儀ハ松にても同じ法なり枯枝と苔とをよく
取払ふべし
刈込物ハ始に根もとの吹芽を能とり払ひ夫より
中の枯枝古葉或ハ虫の巣抔をよく取払ひて
中を健にいたし置て後に外輪を刈込べし根ぶ
の吹芽をとりて其中の取払ひをせずして上透す
刈込とやくの下仕事と知べし刈込物ハ高木從木
丸物角物もすべて同じ能仕事にいたすと流れ
べし亭主より手間を惜まバ其上の了簡なり

石居据の事

石を居るハ先其石の穴を堀其土をもて穴より余程除の方へ除け置べし穴の廻りに土の有ハ地形を失ひ石乃深浅知悪しき故なり又穴の邊りに土の乱れあるハ石の居を悪しくするべし先其居る石の振を定其下より小詰石を能詰て土を少しく入其上を何よく搗堅むべし其より又地形一ぱひに土を入其上又能搗堅むべしかくして足にて其土を踏堅むる事なり其土を搗込る具ハ本挺の庭ハ其石の大小に随ひ大小あるべし大成石ハ大成本挺小成石にハ小成本挺と知るべし又小石に大成道具を仕ふ時ハ害多し大成石も小さき具にてそのするときハ何乃用にも足べからず是ハ此沙汰に限るにあらねど万事同じ訳なるべし扨石を居るにも面のさし渡し壱尺あらバ其穴ハ壱尺八寸に堀べし又面乃さし渡し三尺の石ならバ三尺八寸に堀べし餘ハ之に準ずるなり又穴の懐窄きハ小詰石の働き悪しと知べし又穴乃懐餘りに廣きハ小詰石乃利宜しからずと知べし又石のかく高さを搗沈めんとするにハ石の廻りへ少く土を入て搗べし其土を入ずして小詰石斗にて石を搗とすれハ其石たゞち揺て

て搗しめしとも然るべし石を居て淘土を入まろく
をも堅搗しめしは上にいへるが如くなるべし

雨吐地積りの事

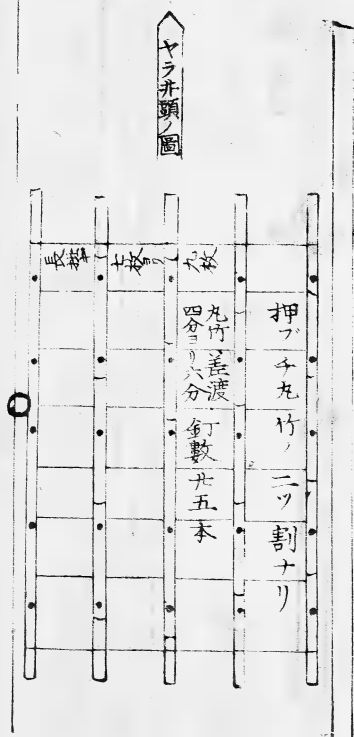
為もの庭は第一番のつとめて最初に是を見積るべし庭
乃大小に寄て一ヶ所より二ヶ所四ヶ所にも雨吐の末口を
るべし先此地の高ひくはいづれの方より水ながれ来るかを見
積と付て其上建物の地場乃高ひくを見清め是より
邸内の土の高ひくを見積りより何れの方へ落地に依て彼方へ為
に落すべしと以て積りを定めて上地形の寸数を斗り目に立
ぬ程の地盛と付て土居を定むべし又此石此石にも盛を付て
極直平に造りと居所に寄りては地形乃上の方と下の方
とに振に寄て石の高低格別に目立めのなり又地形の
高低に寄ど石の寸法を定め居所に於ては石に高
下の目立をつけり依て地形の高下と石の高下とを
斗ひ居る事石の肝要なり鄙の如く心得て飛石
を居る時は地形高下を忽に見えぬものと知べし
又池の框石は何處までも直平に居所なし是に高下
のあるに於ては地なれ全くの水積りゆへ忽に框石乃高
下目に立見苦しき事一番なり縁石上の方にて地より上
石の出ようとする時は下の方に寄りても石乃出ようとて

之縁きが多く際らし枝に添石の上と下とに配りて高
下の有に於ては水際見苦敷と知べし又爲多の地し
所不自由なる也此ゟ自然雨水と池へ落し過ぐる
が爲此の付ねとりして配くが據所なく爲多は池へ落しきるべし
左なくが随分爲多は池へ落さぬやうにと能る応れきを大
稀雨此地形を定る主源とある所は軒内の土の高さこ
主軒内土の高さ乃源とある處は此場石の高さ配り
其地場石の高下とりては大工方の差圖なり庭師乃
さし圖する處に依て此場石の高下に付て
地形の爲此一陣斗が苦しむ所と心得あるべし是は圖
外の法にして最細なり第一番に心得有べきことなり

露地門生込柱の事

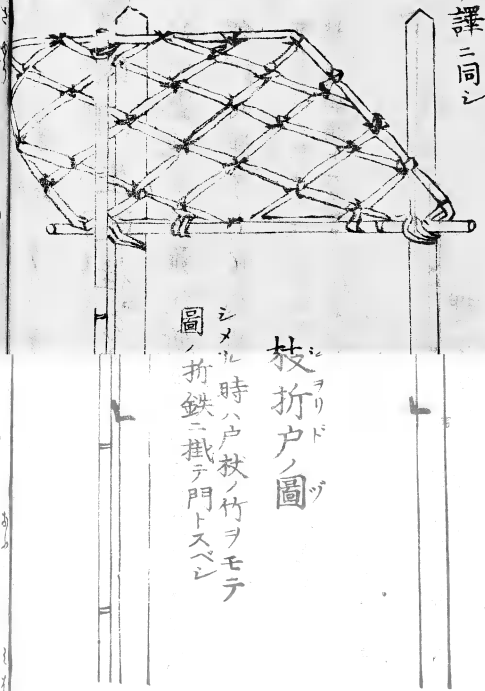
此ニ曰露地日用雜記所ニ謂門道也是所ニ以不ニ更其字ヲ則從ニ邦訓而便子省官爲爾

左右ノ垣ノ点ヨリ柱ノ出短キ方ニテ六寸ヨリ八寸マテ
柱ノ頭駒頭ト云フモアリ行馬頭トモイフ

柱短キ方ヲ半ト云

長キ方ノ柱ハ短キ方ノ柱ヨリ其長サ四寸ヨリ六寸マデ

柱ノ長キ方ヲ丁ト云

柱ノ丈ヲ揃タル圖

柱ハ右ノ譯ニ同シ

枝折戸ノ圖

シメル時ハ戸枚ノ竹ヲモテ圖ノ折鉄ニ掛テ門トスベシ

柱の太さハ左右の垣或ハ戸口の大小に應じて見斗ふべし

柱の長さハ戸口の廣狹乃恰好に仕るべし　柱の根ハ焼焦し根を掘込すミ石を入て能く突固むべし

建物仕方差別の事

宿り腰掛ケ門抔の建物ニ藁葺或ハ柱石抔を用る時ハ大工方の仕事と知へし又掘込の柱或ハ縄からげ建物等ハ庭方乃仕事の部と知べし掘込柱縄からげの建物ニてハ屋根葺事も庭方の仕事なりされど同ニ云屋根の葺方種々あり　大和葺（杉皮）　茅葺（茅葉葭種等々）　葺（綿種）　笹葺（小笹）　草葺（岩蓮花 檜葉 岩檜葉 岩梨子等々）　草葺ハ一種にて

葺もあり種〻取あはせてふくも有なり此葺方ハ下
地を種葺にしておくなり種葺ハ下地を赤土にて
ならし置て其上へ糸種を薄く平し扣き付るなり
軒まハりも同様なるべし

扣土仕様傳乃事

たゝき土の仕様ハ灰と土との加減に傳あり軒内を扣く
にハ土二荷に石灰一俵を合すべし但し土一荷と云ハたま
一荷に軽重あり先土十八貫目と一荷と定め置べし水
加減ハ随分よくすべし世傳にハ土何升に灰何升を何
升といへるなんと相定る古書等も大にかゝわれ愚
なる教なり如何にとなれバ土ハ土の産成もあり加減
に寄て合せ方乃違ふもあり又天氣の晴雨曇等
によりて違へるものゝ依て土の何升何合といふなり
事ハ用ひず只手乃中にて加減を試ミ随分よくと云
ばよく〱合すべし其よろしといふ加減ハ手に握りて見
る時ハかたまりよるやうに思へども手をひろげれバ土ハ二ッ
四ッにも割れて手より下へ落るやうなる加減をよしとして
よろしといふなり又天氣よき日ハ少し土を増し
て加減をあまくすべし此抜ハよく合せ置る片荷斗
乃土を扣き仕舞ざるうちに次の片荷乃合せ土早く

の根元より切先まで下を高低くして氣を配
りをし図すべきなり
まづ前水門などの据るも土仕様石灰合加減は平
地の庭合に同じ但しその加減は平地よりは少しはま
をすべしさて堀は雛形などを種々仕事の様しるく
き所なるも堀に影なしべし
池ありて土二荷に洗荷石灰一俵と合すべし其他加減
余程にあまくして苦しからず是もよく搗まてりてま
きる後の加減なるべし是はそのこととりまる乃なる外なれ
ばなり大凡土は多くに流り日をしるしとなる

べきなり
煉土の仕様は土一荷に石灰一俵と合すべしその加減は
余程あまくすべし桶に入て搗べしまた莚に包みて
能々踏てよし其上を手にて一盃程で団子のやうに
すれば能々たゝきしまり丈夫なり仕事前に試みるべし
石と和土との界目能々塗りて透ぬやうの仕様は灰
搗といふものを用べしさて石灰搗といふものは石灰と水に
て堅くとも能々練て和土の土にある石の根に塗つけ
其所へ合せ土を喰せて丈夫なりに附くべし
石灰は吟味すべし若石灰の風邪と引利ぬやうにし

よりと見が土二荷に一俵といふところへ土二荷に石灰二俵
土ふるひ何れも此格に取計ふべし
軒内真和の仕様は黒土三荷に石灰一俵と合せ是をよ
にて泥のごとくになして軒内に囲をして其中へ流し
込べし日三四日斗も置と戸をよく引て干乾た
る上能く和きたゝむべし其節塩のにがりをおくべきを
面に打ちらして和へし又おくでもりとおちらして
又和べし又和又和して幾度も和へし全体泥のご
とくなる土乃乾たると幾度も和てする故に土は存
外に堅るもの也依て密細泥のごとくなる土を堅つ
る時は余程多分に堅べきなり
軒内赤和の仕様は赤土斗りにて石灰なし其赤土
の産地此辺なきにては田土又も能く搗堅むべし若地
たかりなくしてやわらかになる時はおくりをおりてと
若しかしこ能搗ならして餅のごとくなるものとなし
堅て其上能く和堅むべし是又幾度にも和べきなり
赤土は此格にも気なくして和待ずバ千割のするもの
と知べし

地形仕上様の事

仕上乃地形は石の根際或は樹木根際抔を能く濡透地形の小

石をぬきたる所の土と削りたる所乃削りたる土と低所へ寄せて加へ築て地形となしたるべし尤雨催に應じ目にたゝぬやうに平しおくべし是を小石ぬきの地形と云

上色平しといふ地形の仕方あり此上色に三種あり一に黒色一に赤色一に白色等也其黒色は墨土を能く篩ひ養しおき出來たるならしにあり又赤色は赤土のぼく〳〵土なり此赤色は中に赤松なんど有る庭には遠慮あるべし又白色は白砂のすなるべし細砂とおしふて池のある庭には遠慮あるべし又大暑にはあつりを忌也都て上色の仕上は第二義に屬ると知べし

石などは能く洗ふべし石に土の氣ある時は夫より黄苔と生じ苔と錆とは違ふものなり苔は石の垢なり地形の苔乃生ずるは目出たし石と木に苔の生ずるは病なり其石は土の氣なくして數年乃錆の上へ生ずる錆苔乃生ずるとあり是は彌次珠重なるべし其清に生ずる苔は日に強し其土に生ずる苔は日に弱しと知べしまた石乃手沢乃垢乃苔と見ゆるもの有是を嫌ふ故に手水鉢は度々能く洗ひて石の時代を見まざさるやう別して手を入る乃器なれバ綺麗に過るはあるべからざるなり

庭差別の事

庭は庵あり露地あり庵に内外ある露地にも内外あり又書院向構の庭は建物の花故に其庭の形に都ると見ゆて苦しからねど別荘茶屋向の庭を山水或は園池構ある故に其出地へ建物を趣向して構へて見せ分け造るが細意あるべし

庭造傳　中の巻了

築山庭造傳
前編
下

飛泉穿碧樹
山色滿琴心

沈雄厚壯體
すくやかにしておほやう
いきおひあるさま
誓願寺 竹林院 庭

連珠不斷體
立石樹木の
縁とよく
つゞける
する
本國寺中
勧持院庭

高彩空曠體
景色よりして
おもしろき
すがた

形容浩然體
君子乃氣象

寫眞趣邁の體
山林乃すがたを

欸靄優游の聲
やさしさ柔と
かのきよらく
おもしろき
すがた

大龍寺辻子 光徳寺庭
雄偉清健體
おとなしくすくやうれる景

融化渾成體

意中帯景體

神造自如體
自然乃景び
うつしうる
すりしく

誓願寺中
長仙院庭

清細閑雅の體

丸山貞阿弥庭
相阿弥作
撿束嚴整體
山水格式し
みひゝる
すぐる

温柔敦厚の書に

追分走井庭図
景中含意體
景乃中よ
くかしを
ことをゆく
ゐせ
ろ
すがた

築山庭造傳
高古渾厚體
俗とはなれて
すみかは
こゝろ
すまして
木をしは岩と
化のゝうは
形かなりけ
築山庭造傳下

神清安寂の體
神明もて清浄にあそびするすがた

風情耽介體
庭乃風情

典雅温淳體
庭のてい
ゆとりよ
みどやかなる
すがた
清水成就院庭
烏帽子岩

風景切帳體（ふうけいせつちやうのてい）

形制厳整体
大徳寺
大仙院庭
相阿弥作
イ 臥牛石
ロ 亀甲石
ハ 長船石
ニ 虎頭石
ホ 仙帽石
ヘ 明鏡石
ト 達摩石
チ 沈香石
リ 不動石
ヌ 観音石
ル 拝馬石
ヲ 仏盤石

微密閑艶體
土生地蔵院の庭

平易風雅體
とやうすくなく
やすらかにして
風雅ある
すがた

婉曲委順體
景うるハしく
乃庭と
これと

嵯峨
天龍寺庭
夢窓國師作
委曲詳明體
山谷瀧池島の
あしらひ
くハしく
あざやかなる
すがた

惣じて庭仕掛乃事

庭を造るに口より奥の方へ仕て行あり　奥より口の
方へ仕て出るあり　此論左右ともにその時先庭を造
るには客座敷の方なる所廻りと見合方を手まへと
摘添し又より奥の方へ懸て奥の方あかり所あいかさ
ばけまより又口の方へ廊り口の方あかり所あいかさなけれ
け又奥の方へ又口の方へとして中を眞後にとする
が作法なり扨樹石ともに格別大成ものありて
是を入るに其入口の奥の方に残り口の方に乃ち少し
ハ入口の次第に寄て取計ひの有るべき也是ハ猶
別乃論なり又木石前後の手上にみゆる違ひ強に心得
べからず是をもつて大小振ゝに寄て前後あるべし
中程に池とハ堀成んとならバ先山を築んとする所
へ其池の土を堀上げ積して後に池の姿を定むべし
山の土乃積りの付ざる中ハ池の積りと付べからず山
乃土是にてよしといふ積り振付て後に池の積りと
付べし池より堀上げる土ゟ少し山を築ハ多
くしと定むべし
池に水を入ざるうちハ山を見る事山高し池に水
を入て後に山を見るときハ他の外に其山乃低く

どあるとめおくも
近水ハ高くまくし遠山ハ低くまくし是則金岡が水
石と畫むるを訣ありといへるを出ぶらしかもゆへ
事ハ遠近乃斗ひありと知べし

庭主客乃事

庭ハ奥の方を主とする也口乃方を客とするなりこの
池泊上の燈籠の主客をいへるに同じ庭上乃景を
みむかふの方に六分有べし奥の方ハ四分と心得べし
亭主ハ下座より上にむかへるが故上乃方を主といふ
客ハ上座より下に向へるが故下乃方を客といふ

垣乃事

一垣ハ寸法あり定りたる寸法とす法定りなくして時に
生まれ出る割合の寸法とあり定まる寸法ハ三通りに通り又
通り乃間渡りなりとも下を縦の間渡り土よりる渡
ま乃始七寸是定法なり丈よりま垣の高サに應じ垣乃
又ハ高さて間渡り三通り四通りあり其間ゝ乃寸法間ゝ
壱尺なるべし上乃間渡しより垣の天乃見放しまで壱
尺四寸又中乃間ゝ壱尺弐寸なるべし上乃寸法壱尺六寸
又中ゝの間ゝ壱尺四寸なるべし上乃寸法壱尺八寸是生まれ出
る乃寸法也又竹垣なるべし竹乃節並ハざるやうに互ひ

違ひ小路べし杭の点垣乃点遠ざかれば垣の点より杭乃
頭の出さ弐寸八分より弐寸弐寸五分も出るを見るべし

同根物の事

垣を作るは訳あるなり其わけといふは庭中の垣は必
透し垣にすべし其故は垣のあなたに曲者の有は隠さ
んか抔といふわけなりあながち又垣のあなたなる樹石を
見んとにあらず惣じて庭前は皆根わけなり継し坪の内
小見苦しきものありて垣すそ是を隠さんとならば表構
乃高サに板垣して地際を三寸斗もあげて作るべし是
乙せめのくぎたりとも足元の見ゆるといふわけなり又見

苦しくて見さんといふ其構継さぬなれば地際を透さば
して垣の高サ低くすべしたとへ高サ五尺より高くとも六尺
迄も曲者の隠るゝ便りもあるといふのわけなり茲別御成
庭には垣を高くするべし其庭中にあやしくなる所
あるは亭主より客方への不興気といふ意をわけて手
ものなくが作意とぞいふなるべし此意は手本前栽石或
は燈籠乃明り台のわけ方と同意なり
萩垣の萩は七月八月に刈べし落葉の後は宜しからず
竹垣の竹は十月より霜月極月に刈べし落葉乃
ある宜しからず竹乃穂垣の穂は旬よりの外勿論也

穂ハ湯を通すべし 板垣の板ハ焼べし 焼に付ても葉
びかくバ鉄物を火にして其板を拵て拵廻さるにやくべし
生垣ニ二種あり 刈込の生垣 透作りの生垣なり 刈込の
生垣ハ中ゟ枯枝を能透して後の柄を刈 透垣ハ始より柄を刈
込て後すを透なし 茅垣の茅ハ七月八月に苅べし 尾花
の後宜しかれど 蘆垣の蘆ハ穂出て後よきなり 丸竹ハ
節をぬくべし まぐさ蕨縄ハ湯に漬べし 外ハ水に漬も
よし まくさハ真菰草と書 葛蘿藤の一名なり 杭ハ根
元を焼べし 垣の下の地形ハよくならすべし

垣留の樹の事

垣の端ある留主の杭に添て樹を植るを垣留といふ
樹の高ハ垣の高さにおよそ並ぶべし 樹ハ何にてもよし 隠ぶん
靖なる樹を植べし 垣に結付て苦しからず

袖が香の事

袖の香とハ垣根に梅を植るをいふなり 枝数多きを
宜しかるぞ

燈籠控の樹の事

燈籠の後或ハ脇燈籠に添て樹を植るをいふなり
かならず植べし

同燈籠まハりの石の

蛇籠とハ蛇籠のあるに樹を植て其木乃枝葉ふて蛇籠
のあらハるゝやうに遠閑の模とつけ蛇口の傍
とある蛇籠といふなり夜分ハ蛇籠の所り分にて
庭前の景色も宜しく見えかくさが放ち彼木を植
て夜分のながめともなるなり

鉢請樹乃事

手水鉢乃先へ樹を植て鉢の手入の上へ附さ枝葉の
さし出るを云とするなり但し手水鉢面より壹尺か二寸斗
も上に有しかへ枝葉の出る處手水鉢前面に添り
よきし樹ハ阿茂木或ハ槙木或ハ南天燭或ハ櫁或ハ

萬年樹ハ樹名なり此外何ふても虫乃嫌へる樹なるハ何乃
樹にてもよしたる是ハ手水鉢中ふ自然毒虫抔落居りと云ふ
とも虫の嫌ふ樹なるまバ毒消となるといふの心得にて
彼等の樹を撰びて植るふぞ按ずる又鉢前の景色よ
比鉢請の樹ふあらバ依て木振よき樹を見合せ植べし
蹲踞手水鉢請も同断なりと心得べし

井會釈樹の事

井あしらひとハ井筒ふ添て其井と會釈する樹を云又
なり樹ハ松或ハ梅或ハ柳又ハ竹などよし

下井戸影樹の事

とり井戸のうけ木といふハ下井戸崩を積の方乃中
枠或ハ下乃水際の廻りなどに樹を植て水面に影
乃さし入枝葉あると新木といふ樹ハ松に限るべし
又梅ハ可なり又柳ハ相應もよとも後に其木を立て
根張石を動かしむることある故に當分へうへもせざる
分別あるべし

塚添の木乃事

木ハ何にてもよし塚の後或ハ塚の上或ハ塚の根元
枝横ハ恰好に任すべし只塚の上へ枝葉の掩ひかぶ
さりたるを忌とするなり

庭造傳跋

北村援琴翁。閑居乃地をトて。石に漱ぎ流に枕すといへる古
遺風をしたひ。築山や水のをかしき景をうつし其わ
りさに嘯吟し。道乃心を求め。世の塵紙掛なぐさめ
とす。こゝろざくれどかなるにまさぐひ好人のつくり至れし
庭乃ありさ後てかしこ図を拵び。其ふをえらび體を
かち畫かける人にたよりてことく図に写し拵ね致景
を求むるたすけとせり凡泉石の眺望にいくいみし
き致をさとる者。それさめしかきにしもあしにやさしき
みがめなるにふる古き物語乃中にも前栽築山まの風流

を述ることあまたゝびもとの本づち山のくずまひ西
白さところなる紙池乃んひろく志なして。めでしく
つくりなく志るといひ。或ハ中河乃ほとりなる家なん。この
比名をたいまさく涼しきげよ縛るとなむ。或ハ名乃書ん
おりむき山のをさてをあしくとめてといひ。池名よちいさき
山をあそごてれせきといひ。亀の上まん山もたつ○だしれ歌
なども。皆造りなせる庭れ娘ぜいをあしハせり。援琴翁
此あめる此書ハ。こつくし山名の逸興を味ふ車を他の
人よもをもしめんと。津およ梓木よちりばめて。永く
世の伝へとなせり。一日予これを繙き閲して。其志の

深きよ感じ。おり人車ぶ乃松まんトゝけよいや
しきてと無業の志げなをこすれ。巻乃絶よ筆紙
加ふるもおてがましや

享保乙卯年孫生日　藤井慎斎書

慎斎

浪華　大蔵永常著

農家益

全部五冊

前篇三冊　續篇二冊

櫨樹の國益ある事廣大にして國を利し民を富しむる術の速成事是に過る物なし固食田を費さず路傍堤岡原野又ハ水かゝり悪き不毛の地或ハ火除の地などにもよく生育して五穀菜果の妨をなさず其用る所ハ蠟燭とし鬢附となし其功莫大なり今其種類の分別實蒔の仕様苗の生したて雌樹雄木の見分土地乃見立植揉肥培の法接木の口傳並に生蠟の絞やう晒蠟の製法等図画を以て審に記し農家貨植れ助となし實に有益乃書なり

同　後篇

全部二冊

此書ハ是まで櫨を植し國郡の大益と成し仕法をのべ前篇にもらせる地の開きやう接苗早おしらへの仕やう蠟の製法等にいたるまで微細に志るすたしれ木の製法全備の書なり

積玉圃藏版

大阪心斎橋筋北久太郎町四丁目十五番地　柳原喜兵衛

河内屋藏版記